



→ 1964 → 2024

3Xを加速させる 経営主導のモダナイゼーション

FUJITSU ファミリー会が発足した 1964 年を振り返りながら、未来に向けて、いま注目すべき「モダナイゼーション」を解説します。2025 年の崖が迫り、古くなった情報システムの刷新は「待たなし」の状況です。長年企業を支えてきたレガシーシステムを、どのようにアップデートしたらよいでしょうか。

Back in 1964

日本のビジネスに、世界に冠たる国産コンピュータを

1964 年、FUJITSU ファミリー会の前身、「FACOM ファミリー会」が発足しました。時は高度経済成長の真っただ中、東海道新幹線、東京モノレール、首都高速道路が開業し、東京オリンピックは戦後復興を成し遂げた新生日本の誇りとプレゼンスを世界に示しました。一方、黒船に乗ってやってきた夢の計算機「コンピュータ」の国産化は未だ世界レベルに追いつけず。そんな中で、いち早く富士通製コンピュータ「FACOM」のもとに集まった会員は 37 社。この年リリースされた「FACOM230」は、ユーザー企業の応援を得てシリーズ化され、後世にその名を残しています。

同年、IBM が発表した「システム/360」はエポックメイキングなものでした。単一アーキテクチャによりファミリマシン間のソフトウェア互換を実現。事務計算から科学技術計算まで、あらゆる応用分野をカバーする大型汎用コンピュータは「メインフレーム」と呼ばれ、一躍、時代の主役に。そして、富士通は国産メインフレームで市場に切り込む道を選びます。

世界のコンピュータ市場を席巻していた「巨象」IBM に対抗するなんて。社内外の冷ややかな目をよそに、貫いた無謀な挑戦。その中心にいたのは、後に「ミスター・コンピュータ」と称された故・池田敏雄氏¹⁾です。

「挑戦者に無理という言葉はない」。池田氏の信念に導かれ、挑戦し続けた富士通は、1974 年には LSI を搭載した世界最速コンピュータを完成させました。奇しくも、IBM を離れていた「システム/360」の開発者との共同プロジェクトによる快挙でした。惜しむらくは、世界最速コンピュータの誕生を目前に、池田氏は急逝していましたが、型破りな天才技術者の遺志は、今も富士通の DNA の中に受け継がれています。

「Modernization」は、本来「近代化、現代化」という意味だが、IT 分野の「モダナイゼーション」は、古くなった IT 資産（ハードウェア・ソフトウェア）を、最新の製品や設計に置き換えて最適化することを指す。老朽化・複雑化した情報システムのモダナイゼーションは、冷静に、しかし早急に解決すべき課題となっている。

Latest Trend 2024

モダナイズを企業変革のエンジンに

1. モダナイゼーションは喫緊の経営課題

2030 年、メインフレーム販売終了。2029 年、UNIX サーバ販売終了。富士通の発表に衝撃を受けたお客様は少なくないでしょう。そこに、にわかに浮上した「モダナイゼーション」というキーワード。なぜ今、モダナイゼーションなのか。経営視点で見て、レガシーシステムの刷新が急がれる理由は、大きく 3 つ挙げられます。

一つ目は、維持コストの増大です。長きにわたり個別最適と増設を繰り返した結果、複雑化、ブラックボックス化したシステムの保守・運用コストは負債として積み上がり、保守サービス終了も迫ってきます。

次に、データ活用のしづらさ。社内に個別システムが乱立しデータ構造が統一されていない場合、新しい技術を導入しても、必要なデータの取得や分析が制限され、DX どころか、経営の足かせになりかねません。

最後に、人材不足です。例えば COBOL で記述されたソースを扱えるレガシースキルや、システム構築のナレッジ・ノウハウを持つ技術者が開発現場から引退してしまうと、再構築のハードルはより一層高くなります。

3Xを加速させる 経営主導のモダナイゼーション

2. 可視化から始めるモダナイゼーション推進

経営主導でモダナイゼーションを。かく言う富士通もまた、モダナイゼーションプロジェクトを推進中です。3年前の調査では、富士通には4,000を超える業務システムがあり、それらが個別のプロセスで、別々のデータを日々生み出していました。データドリブン経営の実現にはほど遠い状況を脱却すべく、まず全システムを俯瞰し、稼働状況を可視化。現在、経営・IT部門主導でシステムの統合を進めており、最終的に1,000システムまでスリム化することを目指しています。ここで、自社実践とお客様へのサービス実績から導き出したモダナイゼーションのフレームワークを、4つのプロセス²⁾に沿ってご案内します。

1 業務・資産可視化

現行システムの業務プロセス、アプリケーション構造、データ構造を詳細に調査・分析して可視化。現状の問題点を洗い出します。

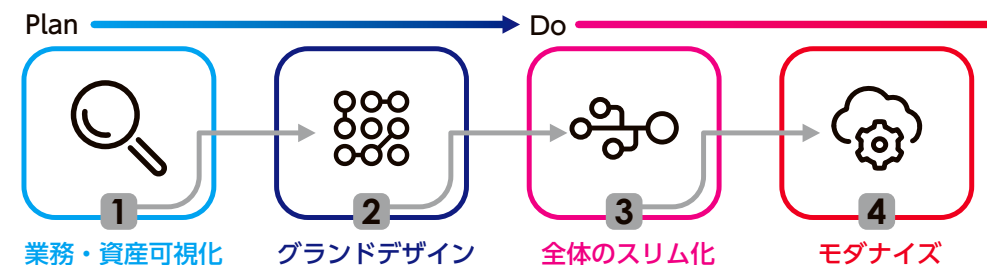
2 グランドデザイン

経営ビジョンに基づいて未来の情報システムの「あるべき姿」を描き、そこからバックキャスト（逆算）してモダナイゼーションの計画を策定します。

3 情報システム全体のスリム化

現行システムで、あまり使われていない、あるいは重複している資産を整理・統合し、不要なものは削減します。

2) モダナイゼーションの推進「4つのプロセス」



4 モダナイズ

短期・低コストの切り換えを可能にする「リホスト」、短期・低コストかつ保守を容易にする「リライト」、最適な機能配置で再構築する「リビルド」、「サービス移行」などを適用し、スリム化と並行してモダナイズを実施します。

富士通では、計画化（1 2）をサポートするコンサルティングサービスや資産分析サービスから、最適な手法でスリム化・モダナイズを実行するSIサービスまで、全プロセスを通してお客様に伴走するモダナイゼーションサービス³⁾を提供しています。メインフレームの安全かつ確実なクラウド移行を実現する「AWS Blu Age（AWSとの協業）」や「Fujitsu PROGRESSION」など、新しいリライトサービスもスタート。多様な選択肢の中から有用なツール・サービスを選び、ベストプラクティスを見出していただけよう、モダナイマイスターをはじめとする専任スタッフがご相談を承ります。

3. モダナイゼーションは3Xに通じている

富士通が提唱するモダナイゼーションのコンセプトは、「Road to 3X (DX/SX/GX)」です。モダナイゼーションは単なる情報システムの移行ではなく、業務やビジ

ネスモデルの変革による競争力強化とビジネスの成長を期するもの。つまり、最終的な目的は企業変革なのです。逆に、3Xを推進するためにはモダナイゼーションが必要不可欠である、とも言えるでしょう。

では、モダナイゼーションをベースに変革を成功に導く鍵は何でしょうか。明確なグランドデザインは必須ですが、そこで重視すべきはシステム刷新後の「データ活用」です。レガシーとして蓄積されてきたデータ、日々の活動により生成されるデータ、必要に応じて外部から取得する情報。これらをどのように活かすか、データから何を見出すかが肝要です。

モダナイゼーションによってサステナブルなシステムを整え、様々なデータを連携させて活用することで、人と組織の動きが変わり、ビジネスの効率、スピード、利益が変わってきます。モダナイゼーションの先には、企業の持続的な成長につながるオポチュニティが広がっています。

Reference

1) 池田敏雄氏について

池田敏雄ものがたり

<https://www.fujitsu.com/jp/about/plus/museum/ikedabiography/>

3) モダナイゼーションに関するお問い合わせ・ご相談

モダナイゼーションサービスHP

<https://www.fujitsu.com/jp/services/modernization/>